

【資料紹介】

八分平E遺跡出土縄文土器の再報告

富樫 孝志

要旨 八分平E遺跡で出土した縄文土器のうち、土器に付着した炭化物から年代を測定した資料について、測定年代の妥当性を検証しながら、報告書の記載を補う形で再報告する。中でも縄文時代草創期の隆起線文土器から、1万年を超える年代を得たことは特記できる。

キーワード：土器に付着した炭化物、測定年代

はじめに

八分平E遺跡は、駿東郡長泉町東野字八分平にある。第二東名高速道路の建設に伴って、2001年～2002年に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（現在は静岡県埋蔵文化財センター）が確認調査の後、発掘調査をして平安時代の竪穴住居跡、縄文時代の集石や焼土土坑、旧石器時代の石器ブロックなどを調査した。その後、2010年に整理作業を行い、2011年3月に報告書を刊行した（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2011）。

縄文時代の調査では、カワゴ平パミス～漸移層で縄文時代早期～前期の土器が出土した。

早期前半の土器は、「西洞段階」と「イラウネ段階」とされる段階（池谷2003）に入るもので、縄文を施した土器には、細かい気泡があり、大きさの割に軽く、表面が滑らかな胎土を使っているものが目立つ。

報告書では、縄文土器に付着した炭化物の放射性炭素年代を掲載しているが、測定年代で9,000年～10,000年を超える年代を示した土器がある。

土器に付着した炭化物の年代を測定したため、土器の年代を直接知ることができるデータだが、報告書では年代測定の結果を示したのみで、測定結果を示しながら、図面を掲載していない土器もある。特に隆起線文土器がありながら、小片であったこともあり、整理作業時に見逃し、図面を掲載していないのは、報告書の欠陥と言わざるを得ない。

そこで、年代測定をした土器について、この紙面を借りて改めて報告することで、報告書の補遺としたい。

年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託したため、測定方法や測定内容、精度などについては参考文献にあげた報告書を参照していただきたい。

1 縄文土器の記載

まずは、年代測定をした土器の観察所見を記載する。報告書で記載済みの土器もあるが、ここで改めて記載する。実測図と拓本を第1図上段、測定年代を第1図下段に示す。

1は隆起線文土器である。なでて平滑にした土器の表面に細い粘土紐を乗せ、粘土紐の上下を指で押さえて固定している。粘土紐は一部が剥落しており、剥落部分を見ると、平滑な土器の表面が見えていることから、なでた表面にそのまま粘土紐を乗せていることがわかる。現代の器では、把手や高台を付ける時、器本体と把手や高台の接着部分に、意図的に傷を付けた上に水で濡らし、双方の粘土が接着部分で絡み合うことで、より強力に接着する方法をとるが、そのような方法は見られない。

2は撚糸文土器で、Rの撚糸を斜め方向に交差させるように施文している。施文後に表面をなでてているため、なでて引きずられた粘土が文様の上にはみ出している。そのため、拓本では撚りを写し取れていない。

3は縄文土器で、LRと思われる縄文がわずかに見える。縄文は、肉眼では非常にわかりにくく、拓本でようやく確認できる。縄文は原体を押し付けたようで、条が1本だけ単独で認められる。転がして施文したように条が連続する状況は認められない。

4も縄文土器で、RLと思われる縄文が観察できる。縄文は原体を土器の表面に押し当てたと思われ、転がしたようには見られない。また、縄文の施文後に土器の表面をなでてているため、縄粒の縁が丸みを帯びている。また、そのために縄の撚りの方向がわかりにくくなっている。

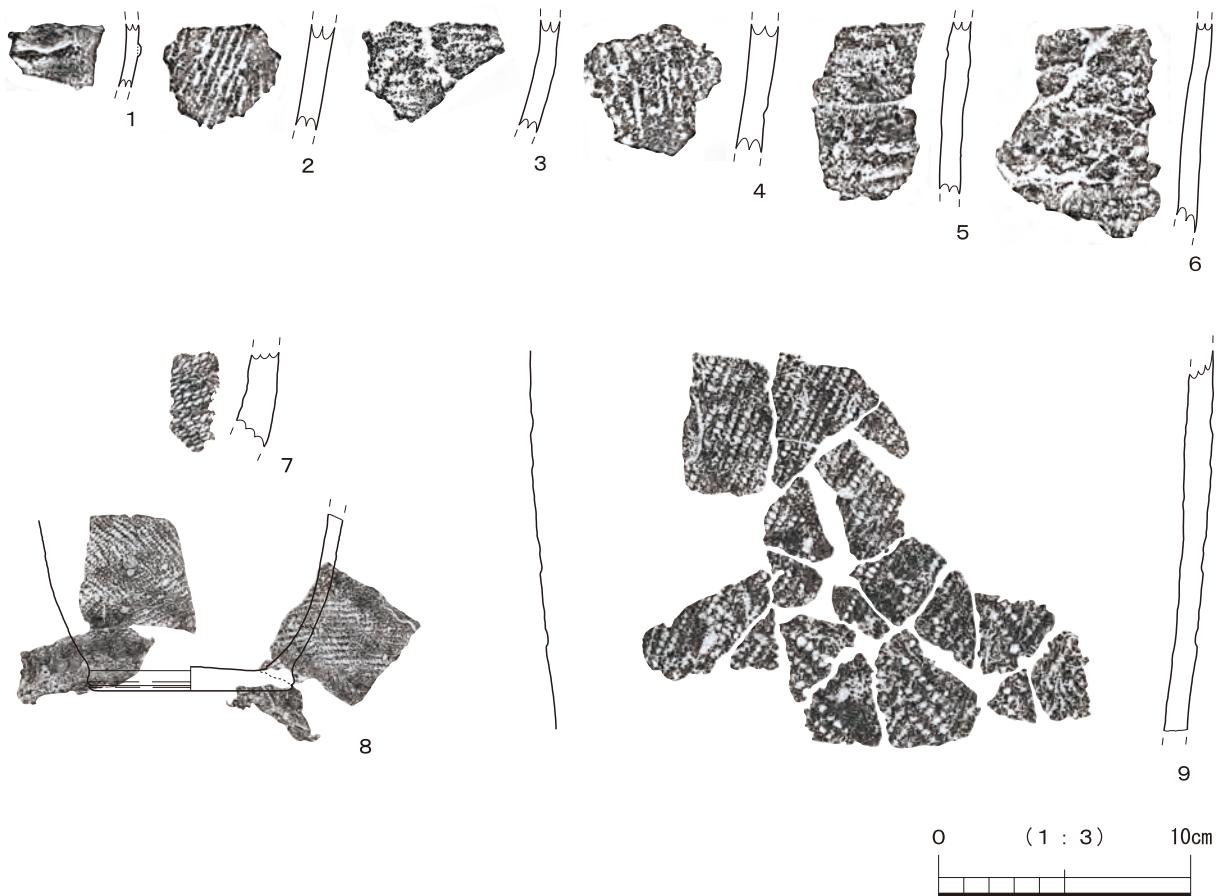


図1 年代測定を実施した縄文土器

表1 縄文土器の年代測定結果

番号	測定番号	遺物番号	出土層	δ ¹³ C補正あり		δ ¹³ C補正なし		暦年較正 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
				yrBP	pMC (%)	yrBP	pMC (%)			
1	IAAA-100736	874	漸移層	11920±50	22.67±0.13	11,890±50	22.76±0.13	11,922±46	11901calBC - 11771calBC (68.2%)	11981calBC - 11676calBC (95.4%)
2	IAAA-100735	4997	富士黒土層	9370±40	31.15±0.16	9370±40	31.15±0.16	9368±41	8709calBC - 8666calBC (25.9%) 8659calBC - 8599calBC (35.5%) 8586calBC - 8571calBC (6.8%)	8755calBC - 8547calBC (94.9%) 8501calBC - 8496calBC (0.5%)
3	IAAA-100733	5526	富士黒土層	9580±40	30.33±0.16	9590±40	30.3±0.15	9584±41	9137calBC - 9110calBC (7.7%) 9088calBC - 9040calBC (13.4%) 9031calBC - 8974calBC (16.2%) 8939calBC - 8837calBC (30.9%)	9177calBC - 8796calBC (95.4%)
4	IAAA-100732	5664	富士黒土層	9370±40	31.16±0.15	9360±40	31.17±0.15	9366±39	8707calBC - 8668calBC (24.4%) 8657calBC - 8599calBC (36.5%) 8586calBC - 8571calBC (7.4%)	8751calBC - 8548calBC (95.4%)
5	IAAA-100729	1396他	栗色土層	4980±30	53.79±0.22	4990±30	53.71±0.21	4980±32	3784calBC - 3710calBC (68.2%)	3929calBC - 3877calBC (9.3%) 3804calBC - 3692calBC (82.7%) 3685calBC - 3662calBC (3.4%)
6	IAAA-100728	1398他	栗色土層	5020±30	53.52±0.2	5050±30	53.33±0.19	5021±29	3934calBC - 3875calBC (39.7%) 3807calBC - 3767calBC (28.5%) 3807calBC - 3767calBC (28.5%)	3807calBC - 3767calBC (28.5%) 3807calBC - 3767calBC (28.5%) 3807calBC - 3767calBC (28.5%)
7	IAAA-100734	7816	漸移層	9780±40	29.6±0.15	9760±40	29.67±0.14	9779±39	9284calBC - 9243calBC (68.2%)	9302calBC - 9215calBC (95.4%)
8	IAAA-100730	2741他	カワゴ平 バミス	4960±30	53.95±0.19	4970±30	53.88±0.19	4957±29	3772calBC - 3701calBC (68.2%)	3790calBC - 3659calBC (95.4%)
9	IAAA-100731	4584他	富士黒土層	9510±40	30.63±0.16	9510±40	30.6±0.16	9505±42	9116calBC - 9077calBC (13.3%) 9055calBC - 9016calBC (12.2%) 8843calBC - 8745calBC (42.7%)	9126calBC - 8996calBC (34.1%) 8926calBC - 8705calBC (60.2%) 8670calBC - 8656calBC (1.2%)

胎土は、独特の滑らかな手触りで、大きさの割に軽く感じる。微細な気泡を多く含んでいるのであろう。「西洞段階」「イラウネ段階」によく見られる胎土である。

5は、文様は見られないが、諸磯b式の胴部下半と思われる。胎土は明るい赤褐色である。表面は平滑ではなく、凹凸が見られる。水分の多い粘土の表面をなでた時、なでた指や工具に粘土がへばり付き、表面を平滑にできない状況がうかがえる。

6も文様は見られないが、諸磯b式の胴部下半と思われる。胎土は明るい赤褐色で、表面は5と同様、平滑ではなく、凹凸が見られる。これも表面をなでた痕跡と思われる。5と胎土、表面の調整がよく似ており、接合はしないが同一個体かもしれない。

7は報告書の第16図-1に掲載した撚糸文土器で、Rの撚糸を斜め方向に施文している。小さな破片だが、文様は明瞭に確認できる。そして、大きさの割に厚みがある。

8は報告書の第23図-31に掲載した縄文土器で、諸磯b式と思われる。LRの縄文を施文しており、羽状に施文している部分も見られる。全体的に施文原体のあたりが浅く、縄文は必ずしも明瞭ではない。また、分割して掲載した拓本のうち、右側に掲載した拓本の上端には結節と思われる痕跡が見える。

底部の直上は無文になっているが、この部分は、底部から胴部を立ち上げる時、胴部が外側へ反り返っている部分で、へこんでいるために手が当たらないのと、土器を正立させた状態では、底部付近の施文は困難なために無文になっていると思われる。

9は報告書の第22図-29に掲載した縄文土器で、縄文施文後に表面をなでており、縄粒の輪郭が不鮮明になっている。そのため、縄の撚りはわかりにくい。報告書ではRLの縄文と記載したが、改めて拓本を観察するとLRの可能性も考えられる。いずれにしても、この土器の縄文施文の特徴は、条間が開いている上に間隔が不規則なことから、縄を転がしたように見えないことと、羽状に施文した部分があることである。条間が不規則に開いている割には、それぞれに条は並行していることから、縄を一本ずつ押し当てたとも思えない。縄を土器の表面に転がしたのか、押し当てたのか、判断に苦しむ土器である。

胎土は大きさの割に軽く、独特の滑らかな感触をもっている。滑石を混ぜた胎土によく似ている。微細な気泡を含んでいることと、デイサイトの粒を含んでいることが原因であろうか。

2 測定年代の評価

次に測定年代の妥当性を出土した地層や他の土器との関係から検討、評価する。

1は測定年代が 11920 ± 50 yrBPで、曆年較正年代が11901calBC～11771calBCの範囲を示した。明らかに縄文時代草創期の年代を示している。測定した株式会社加速器分析研究所の報告によれば、土器に付着していた炭化物の炭素含有率は40%を超えており、化学処理、測定上の問題は認められないとのことであるから、この測定値は信頼して良いであろう。この土器は隆起線文土器であることからも、妥当な年代と思われる。出土した層は休場層の上に堆積した漸移層で、出土層から考えても妥当な年代であろう。

2は測定年代が 9370 ± 40 yrBPを示した。曆較正年代は、8709～8571calBCの間に3つの範囲で示された。後者の年代がやや新しい値を示しているが、測定年代とともにおおむね縄文時代早期前葉の年代を示していると思われる。この土器が撚糸文土器であることから考えても妥当な年代と思われる。出土層は、1の隆起線文土器が出土した漸移層の上に堆積した富士黒土層で、1の隆起線文土器との関係も、年代、出土層ともに矛盾はない。

ただし、測定した株式会社加速器分析研究所の報告によると、この土器に付着していた炭化物の炭素含有率は10%代の低い値を示していることから、測定値の扱いには注意が必要とのことである。

3は測定年代が 9580 ± 40 yrBPを示し、曆較正年代は9137～8837calBCの間に4つの範囲で示された。縄文時代早期前葉の年代を示しており、2の撚糸文土器と近似した値である。出土層も2の撚糸文と同じ富士黒土層であることから、この縄文土器が撚糸文土器と並行関係にあることがうかがえる。

4は測定年代が 9370 ± 40 yrBPを示した。曆較正年代は8707～8571calBCの間に3つの範囲で示された。縄文時代早期前葉の年代を示していると思われる。この土器は早期の縄文土器と考えた土器で、出土層は富士黒土層であることを考えても問題のない年代と思われる。また、2の撚糸文土器と近似した測定結果を示していることから、この縄文土器が撚糸文土器と並行関係にあることをうかがわせる。

ただし、測定した株式会社加速器分析研究所の報告によると、この土器に付着していた炭化物の炭素含有率は10%代の低い値を示していることから、測定値の扱いには注意が必要とのことである。

5は、測定年代が 4980 ± 30 yrBP、暦較正年代は3784～3710calBCの範囲を示している。年代は縄文時代前期後半の値を示しており、この土器が諸磯b式であることと矛盾しない。出土層は栗色土層で、1～4の縄文時代草創期～早期の土器よりも上の層から出土していることからも問題のない年代と思われる。

6は測定年代が、 5020 ± 30 yrBP、暦較正年代が3934～3767calBPの間に二つの範囲で示された。縄文時代前期後半の年代を示しており、この土器も諸磯b式であることと整合している。出土層は栗色土層で、1～4の縄文時代草創期～早期の土器よりも上の層から出土していることからも問題のない年代と思われる。

5と6は、ともに諸磯b式で、同一個体の可能性もあり、測定年代も非常に近い値を示している。

7は測定年代が 9780 ± 40 yrBP、暦較正年代が9284～9243calBPの範囲を示している。縄文時代草創期と早期の境界付近の年代と思われる。この土器は撚糸文土器で、撚糸文土器の中でも最古段階のものになる。出土層は休場層の上に堆積した漸移層で、同じ層から1の隆起線紋土器が出土していることと矛盾しない。

ただ、測定した株式会社加速器分析研究所によると、この土器に付着していた炭化物の炭素含有率が10%代の低い値であることから、年代値の取り扱いには注意が必要とのことである。

8は、測定年代が 4960 ± 30 yrBP、暦較正年代は3772～3701calBPの範囲で示される。この土器の型式が諸磯b式であることと5、6の諸磯b式土器と近似した年代を示していることから、妥当な年代であろう。出土層はカワゴ平パミスで、カワゴ平パミスの年代は、おおむね測定値で3000年前（梶原1981など）と考えられていることから、土器の示す年代よりも出土層の方が新しいことになる。土器が後からカワゴ平パミスに混入したことであろう。

9は測定年代が 9510 ± 40 yrBP、暦較正年代が9116～8745calBPの間に3つの範囲を示している。年代は縄文時代早期前葉と思われ、この土器が早期の縄文土器と考えられることと矛盾しない。出土層は富士黒土層で、2の撚糸文土器、3、4の縄文土器と同じ層から出土しており、年代値も近似していることから、妥当な測定値と思われる。

1～9の土器、いずれも土器から推定される年代と出土層、実際の測定年代値の3つの間に矛盾する点はなく、信頼できる年代値が示されていると考えられる。

3 まとめ

以上で、八分平E遺跡で出土した縄文土器のうち、土器に付着した炭化物から年代を測定したものについて、報告書を補う形で再報告した。

今回は縄文時代草創期～前期の土器9点について、再報告するとともに測定年代の妥当性を検証した。いずれも土器から推定される年代、出土した層と測定年代に矛盾はなく、問題のない測定結果と評価できる。

中でも隆起線紋土器の年代を直接測定して、1万年を超える年代が得られたことから、土器の年代だけでなく、土器が出土した漸移層の年代が、下の休場層に近い年代であり、まさに旧石器時代から縄文時代に漸移する時期の地層であることをうかがわせる結果である。

また、撚糸文土器と軽じょうな胎土をもつ縄文土器が近似した年代を示し、並行関係にあることをうかがわせたことも特記できる。

縄文時代前期の諸磯b式土器については、いずれも近似した年代を示していた。そして、諸磯b式土器が、草創期～早期の土器よりも上の地層から出土していることから、漸移層～栗色土層といった、縄文時代に堆積したとされる地層と縄文時代の時期を対比させる上で参考になるデータであろう。

土器に付着した炭化物から年代を測定したこと、土器の年代が直接わかるこの意義は大きい。これまで、整理作業の過程で現代人が土器に手を触れるため、土器に付着した炭化物からは信頼のおける年代は得られないと言われてきたが、実施してみると問題のない測定結果が得られることがわかった。今後は他の遺跡でも積極的に実施し、データを積み上げる必要がある。

参考文献

- 池谷信之 2003 「縦位密接施文から異方向帶状施文へ—駿豆地方押型文土器の変遷と立野式—」『利根川』第24・25合併号
梶原めぐみ 1981 「伊豆天城カワゴ平火山の活動様式と地形」『お茶の水地理』第22号 お茶の水女子大学
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2011 『八分平E遺跡』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所